



大学

名古屋帝国大学の創設は昭和14年。

旧帝国大学で一番遅く、愛知県の寄付で開校にこぎつけた。

また戦後すぐに開校した愛知大学も旧制大学となる。

photo:Hitoshi Kumamoto

column

瀧文庫と 図書館



【滝学園発祥の地】

瀧文庫は、滝学園正門脇の細い道を西に500メートルほど進んだ先の、木々に覆われた敷地の中央にたっています。もともとここには瀧信四郎の生家があり、その一部は通りに構えた長屋門の奥に残されています。

外装には水色の下見板が張られ洋風の佇まいを見せながら、中央の玄関ポーチには唐破風の屋根が載る和洋折衷のデザインです。向かって左側に図書室が、右側には講堂があります。館内には木製の凝った建て付けが残り、特に天井の仕上げは今もきれいな姿を見せています。文庫内の図書室には2万冊以上の蔵書があったといい、読書と講話を何より重んじた信四郎の思いが、この建物には詰まっています。

昭和8年に、瀧実業学校の校内に図書館が建てられると、蔵書もそちらに移されました。当初は平屋でしたが、昭和40年の増築の際に2階部分を大きく張り出す今の姿になりました。館内は柱のない広い空間で、小さな町の図書館くらいの規模があり、司書もふたり常駐しています。増築部を設計した黒川^{みき}巳喜は、愛知県営繕課時代に愛知県庁舎の実施設計を担当した実力者で、建築家黒川^{あしろう}紀章の実父としても知られています。



photo:nawoko kato



photo: Hitoshi Kumamoto

正面の外観。メガストラクチャーのスケール感と繊細な造形の構成が美しい

名古屋大学豊田講堂

現代建築の巨匠が二度手掛けた、奇跡の講堂



講堂内部。天井のシェルに注目

学校の顔

東大の安田講堂、早稲田大の大隈講堂、そして名大の豊田講堂。大学に顔となる建物があるのは幸せなことです。それは、地域社会の誇りとして、多くの人々に記憶され続けるからです。

本山から八事へ抜ける山手グリーンロードを進むと、バスロータリーや地下鉄の駅が集

まる開かれた場所に出ます。東の丘には豊田講堂が、西には大学のキャンパスが、道を跨いで軸のようにつながっています。この軸の先には名古屋城が位置しています。

この軸の構想、アーバンデザインの基点として豊田講堂を見たとき、建物に込められた意図が見えてきます。

建築からアーバンデザインへ

名古屋大学は戦後に旧名古屋帝国大学などを統合して設立されました。官民が協力してキャンパスを整備する中、講堂はトヨタ自動車工業株式会社の寄付で、創始者豊田佐吉の偉業にあやかかって「豊田講堂」と名付けられました。

設計は若干30歳の建築家槇文彦。当時の日本建築界では丹下健三を中心に優秀な建築家が登場し、世界中から注目を集めていました。槇はアメリカでアーバンデザインを学んだ経験と、同世代が旗揚げした建築運動メタボリズムを横目



ヒロティからキャンパスを見る

に、講堂のデザインに取り組みました。まず目を惹くのが、80メートルの巨大なコンクリートの梁です。それを細い柱とコ形の壁で持ち上げています。梁の下の白い壁面が講堂で、脇の通り抜けのヒロティの先には森が見えます。槇は建物のコンセプトを、キャンパスと森をつなぐ門と考えました。また時計塔や講堂は、威圧感を消すようにシンメトリーを崩して配置されています。講堂内に足を踏み入れると、上空にはシェルが浮かび、大きな照明器具が吊られています。これらダイナミックな造形を支えているのが、巨大な梁やコ形の壁などの構造体です。

槇は、巨大な構造体が創り出す象徴的な建物が大学の軸の要になり、都市の景観へとつながっていくようなスケールの大きいデザインを構想しました。

巨匠の帰還

平成20年、豊田講堂は老朽化に伴い大規模な改修が行われました。世界的建築家となった槇はその改修設計にあたり、通り抜けだった空間の一部をガラスで囲って、気持ちの良いアトリウムに生まれ変わらせました。



かつては外部だった2階アトリウム

また傷んだコンクリートの表面を削り、打ち放し仕上げを再現した外壁改修工事も行われました。同じ設計者が登録有形文化財の改修を手掛けた極めて稀な建築です。

大学の顔をつくった若い建築家が50年後に老練な巨匠となって再び建物を蘇らせる。そんな物語が愛知の最高学府で体現されたことは、地域社会にとって本当に幸せなことだと思います。

1960年昭和35年 / 2008年平成20年 改修
鉄筋コンクリート造3階建て地下1階 / 鉄骨造
[設計] 槇文彦
名古屋市中村区千種区仁座町1
http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/
videoarchive/toyodakoudeor/toyoda.html



南山大学のキャンパス。コンクリート打ち放しと赤土色のデザインで統一された校舎が美しい

photo: nawoko kato

特集3 名建築家の手掛けたキャンパス



改装された校舎。壁画はレーモンドのデザイン

アントニン・レーモンドの南山大学

愛知には名古屋大学のほかにも、名建築家が設計したキャンパスがあります。チェコ出身の建築家アントニン・レーモンドの南山大学と、その弟子吉村順三の愛知県立芸術大学です。

南山大学は名古屋大学から歩いて10分ほどの丘陵地にあります。レーモンドは土地の造成を極力おさえ、丘陵の馬の背を軸として校舎を配置しました。レーモンドは鉄筋コンクリート造の第一人者で、ここでも得意のコンクリート打ち放しを用い、赤土色のデザインで校舎を統一しています。南面には日差しを和らげるルーバーを取り付け、建物の表情に変化

をつけています。

建設から50年以上が経ち、老朽化の進んだ校舎は近年レーモンドのデザインを継承しつつ改修され、おしゃれでフレッシュなキャンパスに蘇りました。古色を帯びた校舎に新しい彩りが加わり、学内はとも賑わっています。

吉村順三の愛知県立芸術大学

一方の愛知県立芸術大学は、長久手の丘陵



photo: Ryota Murase

愛知県立芸術大学のゆとりをもって配置されたキャンパス

地にキャンパスを構えています。

構想段階からキャンパス計画を任された吉村は、建物と建物の間隔をたっぷり取り、高さを押さえた校舎をゆとりをもって配置しました。また全体的に小さめな寸法で設計され、校舎はどれもコンパクトで身体にフィットするように考慮されています。

一番の見どころは、トップライトが学科ごとに違い創作に適した採光が追求されていること。館内を散策していると、思わぬところに光が落ちる美しいシーンに出会えます。

吉村もレーモンドと同じく、土地造成を最低限に留めて、植栽に力を注ぎました。完成から50年以上が経ってキャンパスは緑に覆われ、学生たちは穏やかな空気の流れる構内で日々創作活動に打ち込んでいます。



光が落ちる美しいシーン



吉村さんは
レーモンドさんのお弟子さん。
ちなみに愛知県立芸術
大学からは、現代アートの
奈良美智さんや杉戸洋さん
が単立っています。





緑に囲まれた記念館。白いドイツ下見板の外観が目目を惹く

愛知大学記念館(旧陸軍第15師団司令部)

貴重な資料の眠る、旧陸軍庁舎の大学施設



photo:nawoko kato

広い階段ホール。タペストリーは平松礼二作

陸軍第15師団司令部

建てられた経緯や抱えた歴史が建物の魅力となる場合があります。

愛知大学記念館は、はじめ、豊橋に誘致された陸軍第15師団の司令部として建てられました。師団とは戦略を遂行できる編成単位で、第15師団は日露戦争後に増設されました。兵数1万人、関係者を合わせると2万人が街へ入植することになるため、各地で誘致合戦が行われました。豊橋が選ばれたのは、満州に似た地形が演習に適していたからだといわれています。

これを機に豊橋の街は道路整備や路面電車

の敷設、電気、上下水道などのインフラ整備が進み、師団の建物は洋風建築で建てられたため、豊橋にそれが広がるきっかけになりました。現在、愛知大学内には司令部を含め、6棟の建物が残されています。

大正14年、第15師団が廃止されると、建物は陸軍教導学校などに引き継がれました。

司令部は木造2階建てで、中央にペディメントの載る玄関がつき、白いペンキの塗られたド



名物企画の平松礼二展覧会

イツ下見板の外壁に瓦屋根が重ねられています。建物は南面していますが、コの字の平面に中廊下型の構成で、庁舎建築のプランとなっています。

館内に入ると、趣のある階段のほか、いたるところに木製と漆喰の建て付けが残り、往時を偲ばせています。

東亜同文書院から愛知大学へ

愛知大学の前身は東亜同文書院といい、明治34年に上海で開学したビジネススクールでした。創設に尽力した東亜同文書院初代会長の近衛篤磨は、欧州列強に対抗する東アジア構想のため、日清間での教育・文化交流と人材の育成を推進しました。

やがて終戦を迎え、東亜同文書院は本国での再開をめざしますが、GHQの意向で頓挫。戦中に内閣総理大臣を務めた近衛文麿の存在が影響したともいわれています。文麿は篤磨の長男でした。その後、名称を「知」を「愛す」を理念に「愛知大学」と変更して認可を得て、豊橋の旧第15師団の施設が提供されました。

愛知大学には、東亜同文書院時代に収集した膨大な資料が集められ、その一部は記念館

1階で公開・展示されています。中には、当時の日本と東アジアの関係を伝える貴重な資料が、いまだ手つかずで眠っているといえます。

平松礼二画伯特別展覧会

愛知大学記念館には、期間限定の名物展覧会があります。

国内外で高く評価されている日本画家の平松礼二は同校の卒業生で、毎年11月15日前後に展覧会が開催され、多くの人々が詰めかかっています。

おおらかな空間に色とりどりの屏風絵が展示される様子は、木漏れ日の差すキャンパスとあわせて、とても艶やかです。



2階旧学長室

1908年 明治41年

木造2階建て

〔設計〕臨時陸軍建築部

豊橋市町畑町1-1

<http://edu.aichi-u.ac.jp/tao/>

※見学可 月／金／10時～16時 土／10時～12時

休館日／日曜日 祝日、創立記念日、夏期・冬期休暇期間



道場内観。窓から差し込む光で混構造のトラスが美しく浮かび上がる

photo: Ryota Murase

旧愛知県岡崎師範学校武道場

屋根架構が美しい、セセッション風の旧武道場



セセッション風の外観

架構の美
構造はぶつう、建物を支える裏方的な存在ですが、時に空間の主役となる場合があります。旧愛知県岡崎師範学校武道場は、木組みと鋼材の張り巡らされたトラスの架構が主役の建物です。

師範学校について

師範学校は教員を養成する学校で、明治5年の「学制」の公布に基づき設立されました。当初は「学制」で区分された大学区ごとに設置が推進されましたが、後に各府県に移管されます。

愛知県では明治6年に愛知県養成学校が設置され、それを第一として、同32年に岡崎に第二師範学校がおかれました。明治35年に現



壁と木組みのディテール

過渡期の造形
外観を眺めると、小ぶりに姿に驚きます。棟までの高さは7メートル程で、ぶつうの2階建ての住宅と同じくらいです。ただ外壁が鉄筋コンクリート造のため、がっちりした印象をうけます。細部の造形には、柱型と柱頭に幾何学的な装飾が付き、壁面を飾っています。これは19世紀末のウィーンで興ったセセッションやアール・デコのデザインを彷彿とさせます。他の学校にも同じような線形の柱頭があることから、設計を担当した愛知県営繕課に共通の型があったのだと思います。道場内に足を踏み入れると、印象は一変します。ひろびろと開放された空間には木組み

在地へ移転し、校舎や寄宿舎、附属小学校が建てられました。武道場は剣道部の活躍を受けて大正末期に建設されています。ちなみに、この頃の愛知の県立中学校でも同様の武道場が建てられ、半田高校や西尾高校に現存しています。現在この建物は、愛知教育大学附属特別支援学校内にありますが、耐震性能が不足しているため、使用されていません。

が整然と並び、それをつなぐ鋼材が中空で縦横に張り巡らされ、豊かな造形力に圧倒されます。また外観では存在感のなかつたくもりガラスの窓がたっぷり光を採り込んで、ペンキで白く塗られた天井と架構が浮かび上がり、道場内には神聖な雰囲気すら漂っています。合理的に組み上げられた構造物の美に人はしばしば目を奪われますが、ここではそれが空間を支配しているのです。

この小屋組みは鉄筋コンクリート造の施工技術の揺籃期のもので、屋根架構が木造トラスと鋼材を合わせた混構造でつくられたことは、今では貴重な見どころとなっています。



本来の正面入り口

1926年(大正15年) / 1966年(昭和41年)改修
鉄筋コンクリート造平屋建て
【設計】愛知県営繕課
岡崎市六供町八貫1-1
※非公開



photo: nawoko kato

夕日に染まるファサード。スクラッチタイルにツタの這う美しい外観

愛知学院大学楠元学舎

ツタの這うファサードが美しい、旧制中学校校舎



庇、柱、窓、間柱、基礎部が調和する壁面

愛知中学校

名古屋の中心を走る広小路通を東へ、昭和塾堂のそびえる城山八幡宮の側に、愛知学院大学楠元キャンパスがあります。

門の正面のツタの這う建物は、昭和3年に鉄筋コンクリートで造られた同校の前身の愛知中学校の本校舎です。

愛知学院大学は、曹洞宗の僧侶養成学校に始まります。明治維新後の廃仏毀釈で打撃を受けた仏教界は、それを乗り越える道を布教と教育活動に求めました。その後、大正14年の中学校令の発足に伴い、一般の子弟も受け入れる愛知中学校へ改称されました。

ファサード解題

愛知学院大学楠元学舎の一番の見どころは、ファサードの美しさです。南面した片廊下型は他の校舎と同じですが、前面には庭を配し、運動場は校舎の北側に設けられました。

正面の幅は72メートル。中央には玄関ポーチが付き、その上にペディメントをかたどった壁が立ち上がります。また両端を突き出し



2階のホール。軒のある部分が以前の外壁

て、横に長いファサードを引き締めています。細部を見ていきましょう。明るい茶系のスクラッチタイルが全面に張られています。古典主義建築を思わせるどっしりした柱が基礎部から伸びて1階と2階をつなぎ、その間にはスチールフレームの大きなガラス窓が並びます。また、柱の角をカットし、間柱にスクラッチタイルを張ることで、壁面の存在感がいつそう増しています。赤いスペイン瓦の葺かれた浅い庇も、壁面の彩りに華を添えています。

設計者の佐藤三郎は壁面のデザインが得意だったと伝えられますが、装飾のバランスや陰影、素材の扱いなどに、その力量をうかがい知ることができます。

昭和9年、本館のすぐ隣に、佐藤が設計した同じ壁面デザインの講堂が建てられました。が、残念なことに戦災で焼失しました。

大改修のポイント

平成28年、老朽化に伴い大規模な改修と増築が行われ、建物は大幅に姿を変えます。ただ、外観に関しては当時の姿を壊さないように細心の注意が払われました。スチールサッシュはそのまま残し、壊れたス

クラッチタイルは新たに作り直して補修されています。

館内の2階には、校舎裏側の外壁を取り込むかたちで増築された興味深いホールがあります。白色で統一された広い空間には、愛知学院大学の歴史を紹介するパネルが展示されています。

夕暮れ時、キャンパスの目の前まで迫る住宅地の中で、夕日を浴びて立ち尽くす校舎の姿は、思わず見惚れる美しさです。



側面の階段塔。手すり壁の造形が面白い

1928年昭和3年 / 2016年平成28年改修
設計 佐藤三郎
鉄筋コンクリート造2階建て
名古屋市千種区楠元町1-1-100
https://www.aig.ac.jp/access/kusumoto_sunori/
※見学可